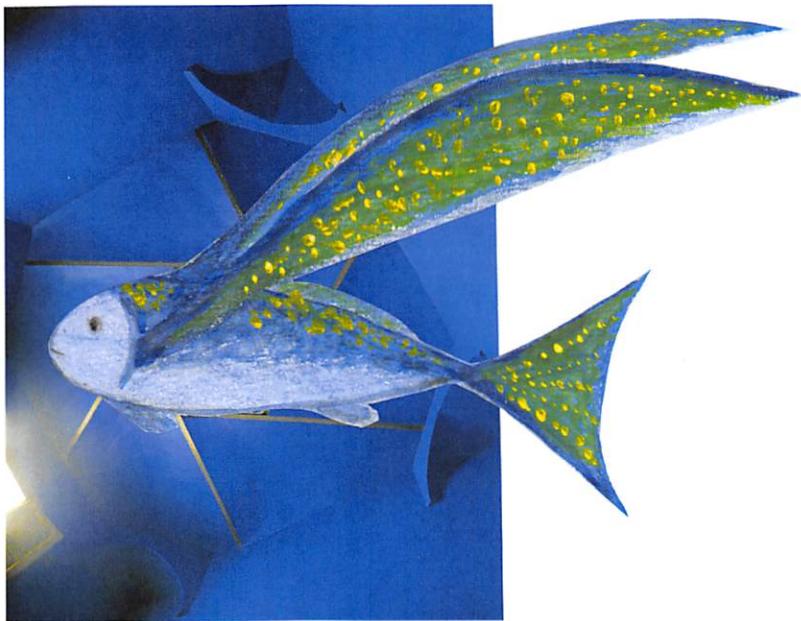


# 地中海

MARE MEDITERRANUM

2018. 4



## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なもの同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みんなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神性の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。



## 夏の大三角形

浜田 恭江

昭和四十六年生まれ。  
大阪支社所属。  
東大阪市にて学童保育支援員と  
して働く。

山陰の小さな集落午後五時と正午に流れる町内放送

長靴で残すあしあと雪の道幼きころの兄とならんで

窓という窓開け放ち扇風機まわして蚊帳のなかへと眠る

まげを結う曾祖父の写真仏前にいつも置かれたそばぼうろの缶

妹のビーチサンダル流されて思わず飲んだ海水の味

釣りをする父のかたわら日がのぼりきらめく波をただ眺めてた

夕飯にカレイの煮付け食べなれた味より祖母の味は薄くて

きんきんに冷やしたすいか縁側で庭へと種をとばして食べる

軽トラの荷台にゆられ山道を梨の収穫作業に向かう

百までを数えて入るきまりごと五右衛門風呂に肩までつかる  
カナカナの鳴き声とおく夕暮れの坂道母と手をつなぎゆく

海水浴終えてうとうと昼寝する高校野球の実況中継

ワンピース肩ひも辺りがひりついて鳥取砂丘は夕日に染まる

潮風がからだを纏ういか釣りの船が灯りて等間隔に

日航機御巣鷹山に墜落す記憶にきざんだ十四の夏

祖父からはついに語らず被爆者の慰靈に参る八月六日

服を脱ぐことはなかった一度だけ背中に火傷の痕跡みつける

近寄れずいた幼き日取り壊す前にのぞいた裏庭の蔵

見上げれば父との思い出こぼれおち今年も夏の大三角形

名水に選ばれし水飲みほして父に代わって草刈り挑む

# 作品 A

坂上直美 正月

・天

佐久間 晟 日乗（九）

・湾

産土の社ならねど家近き小さき社に初詣せり  
 あの白き花は何ぞや冬の日の通りすがりの古き家に咲く  
 父母と姉と過ぐし正月は百人一首に声あげてけり  
 我が札は「幣もとりあへず手向山」菅家たまわれその深き知恵  
 母の手は「からくれなる」に伸びにけり誰が面影を重ねたまいし  
 百人一首京の町家の奥の間に父の大き手母の細声  
 初春の空の彼方に比叡立ちて寿ぐならん平安の街

坂出裕子

オリオン

・洛

佐藤道子 大寒

・甲

水りたる山茶花のはな枯れながら白く輝く朝の光に  
 雪空に花芽かかぐる花水木まがふかたなく春は来るよと  
 いら立てるところなりしが子と孫の電話のあとを不思議不可思議  
 あぢさるの枯れ華凍れり土の上にまだ生きてると背筋伸ばして  
 犬さへもさみしからむか水雨降る夜を遠吠えのときれときれに  
 元栓を閉めてオリオン見上ぐるを楽しみとするひと日のをはり  
 オリオンの輝く空が窓の外にひろがる夜をねむるしあはせ

風煮る早春の空に誰彼の面影浮かぶ昨日も今日も  
 香川師は今も生きてるシャツに服、靴にネクタイがわれを包みて  
 洋服の「香川」の刺繡は解かざりわが身を護るお守りとして  
 近ころのわが師の写真はもの静かかつては怒りの顔に見えしが  
 師の声の「おーい佐久間」が聞こえる何か言い忘れし事のあるらし  
 時折に見せしやさしいあの笑顔しかし私は笑顔が恐かった  
 鍛えられ鍛えられしとは思わざりただ今のわれの仕業の華は

みぞれ降る寒き朝をアーモンド小さな真珠の花芽かかぐる  
 三寒四温死語となりしや冬将軍寒寒寒鐘鳴らしゆく  
 物なべて心があるや寒き夜をボカトレ独りトイレ暖む  
 生れてより九十年は夢の間にされど寒さのこの月長し  
 子に頼り子を愁ひつつ過す冬寒さの中をかがまりて生く  
 朝起きて動けることの幸せをしみじみ思ふかじかみながら  
 同年の友の賀状が無事届く健やかなればこよなく嬉し

椎名恒治

宗雄

・橋

閔根榮子 民話

・埼

夫宗雄にそのガン末期を偽りて見取りたる板橋節子の手記読み了る「宗雄」「宗雄」の連発に小林宗雄を思ひ出したりわれは  
わが書架にでんと居座る『日本の奇祭』表紙染色は小林宗雄  
（大樹の許に大樹育たず）と豪語して去りし宗雄如何しきりや  
西武新宿線沼袋駅にて待ち合せ飲みしこもおぼろとなりぬ  
「萬春」の歌会司会を手際よくつとめたりきかの口調忘れず  
樋口美世とよく論争をしてをりきその美世もその後を知らず

### 鈴木結志

#### 妻との旅

・福

妻逝きてわれもある世にいる思いの物語りめく錯覚にいる

汝が戒名わきの浄界わが靈位お待ちな熱く位牌を抱く  
淨土へと妻の御靈を導くか冬実（孫嫁）の念入り無垢の折り鶴

淨信をもっぱらにして妻の安らぎ祈り薰香を炷く  
妻の死を偲ぶ夜伽のわが姿映して垂る熱き蝶涙

生前の妻との旅は北海道京沖綱にハワイがありぬ  
汝が追影われをゆかしと思ほゆか何處にいても立ち居見守る

### 世木田照比古

#### 農夫

・茜

一徹に自然農法守り來し農園の主農園に死す

無農薬の野菜を食みて米寿なる頑固な農夫を兄と慕いき  
百歳を越えて生くると自他共に思いしが八十八歳に逝く  
無農薬に徹せし信条世の人の健康のみを常に希いき

農園の溝に倒れて雪が覆い人知れず正月の四日過ぎたり  
命懸けて守り育てし農園に雪を被りし四日の哀れ

自力にて身動きならぬ溝に落ちあえなく逝きし無念を想う

小夜更けの窓ゆ仰けば雪残る甍の上の月蝕あかく

月蝕のあかがね色に終りたりスープラッドムーンとう

月蝕とう宇宙に太陽・地球・月の一直線上に並ぶ無辺さ  
ふかぶかと雪積もる日は民話ふと読みたくなりて『わらしへ長者』

若菜摘む古歌思いつ雪分けて畠の小松菜を収穫しおり  
鳥らみなひもじかるべし雪積みし田よりわらわら飛び立ちゆきぬ

テレビにて今日の面白、築地には客が老眼鏡を預けゆくカフェ

### 閔根和美

#### スコップ

・埼

ひとひとり見えざる雪の野の下にすなすなすしろ思ひそむるや  
干すせつなシャツはバリバリ凍りたる肩いからせる形のままに  
義父の家の雪かきそれは君の役わが家はわれとスコップをもつ  
のこしたるはずなき雪が凍りつきカーボートより雪崩れたるなれ  
一瞬を右手かばえば腰を打ちああ右足の捻挫かまたも  
大根をまずは炊きつつ鍋にせん肉にせんとや迷うもたのし  
花の香につつまれ眠る至福あり必ず醒るものなればこれ

### 高尾恭子

#### 柏道たどる

・大

霜風にきしむ背骨をだましつ熊野源流柏道たどる

結ぶ手をこぼれぬ嵩の幸せに温もつてはる冬の露天湯  
ちっぽけな齧齧に苛つくちっぽけな五体を露天の朝湯にさらす

まさらな朝の疾風に背押され子犬のように吐く息熱し

白杖のかそけき音を見つめおり吹きつさらしの各停の駅  
五本目のビニール傘を持ちかえる夕空暗れて漁すすりつ  
サヨナラがこだましてはる夕暮の風よ異郷へ櫻つておくれ

5

高津砂千子 やぶこうじ

風

田土成彦 蜂蜜

・宙

廃屋の庭木はつさり伐り取られ見下ろすかなた海のかがやく  
深夜便に耳かたむけし姑のしのばるなり真夜を目覚めて  
おお寒い急ぎ手袋編みあげな雪よしばらく待つておくれ  
一面の雪景色なる朝の庭の庭すすめのつがいチュチュと遊べり  
数本の万両育つに気付きたり鳥のみやげか大切にせん  
杉苔に積もりし雪がじゅわっじゅわっ午後の光に溶けてゆくなり  
やぶこうじの斑入り暁う積雪のおおかた消えし町の花屋に

高橋和代 うす紅かさね

・桃

雪花の突と降り来し朝戸あけ うす紅かさね桜ふぶきと受く  
廊下では幼のことく小走りす深む老いの身鍛へむとして  
点滴に相席の姫艶の無き顔しかめるて思はず声掛け  
連れ来しは孫娘と見たるも冷やかなしぐさに老女の日日が見え来つ  
老人施設にも弱きをいちめる人のて辛き所と涙ぐみたり  
看取りする人の居なくば仕方なし「氣を強く持て」と背に触れて来つ  
他人事にあらず深みゆく病ひいつそ氣楽と天に任せば

竹下妙子 水雨ふる

・霧

韓國岳とふ美しき名を持ち崇められ怖れられつつ地は燃ゆるなり  
韓國岳に吸はるる雪のたまゆらに歌くづのこと光り放でり  
風の音に囁き交はす樹々の声霧島連山越えてゆきたり  
あはあはと昏れてなほある霧島のふるさとの町ありがたきかな  
はつ春の霧島山の耀ひて明日を生きむとまた思ふなり  
幾年を生きつきて來し桜木の水雨を浴みて鎮もりるたり  
亡き夫のどこにもあらぬこれの世を水雨ふる夜の水雨の思ひ

田土才恵 つどい

・宙

ぬつたりとした蜂蜜を舐めてみる喉やこんこん止まぬ夕は  
鼻水と咳と嚏にくちやくちやの頭をころがせてどうにでもしろ  
すべり台滑り疲れて楓の木の壇へ帰る鳥二、三羽  
備へ置くメモと鉛筆浮かぶかも知れぬ天与の歌を書くため  
シンフォニー聴かず長編小説読まず鑑賞にも体力が要ると言ふこと  
感動は湧くものならず無理矢理に湧かせて一首の歌を組みあぐ  
あと五年いやこの冬はなどと言ひどうにか後期高齢者となる

垣間見しひとの半生つどいたる同級生とう群れなかにして  
君もきみも卒業以来半世紀こゆれば見知らぬ人となり果つ  
志望校いとめし冬の空高し明星ひとつ輝きを増す  
卒業を待たず引っ越し終えし子のこの先いくつの出会いと別れ  
きらきらと冬の琵琶湖の真上より一直線にゆけよ明星  
しまき降る雪の夕べをぬぐい去り湖畔の町の灯り燐めく  
きらめける向こうの岸の町あかり湖畔の宿にしばし親しむ

虎谷信子 正月すぎぬ

・伴

ほのかにも 香りたちくる七草粥。ふたたびの祝ぎ 七日正月  
野につみし頃はも 七種そろはねど、粥たゆたゆし 奪き日のこと  
せりなづなごきやうはこべ ほとけのざ すすなすすしろ ああ云へた  
小正月から やぶいりの日とて実家にて、くつろぎしとや母物語  
お旅所のトンド行事もなくなりぬ背戸でのおタキ上げ火群守りゆつ  
羽子板を飾る 華やぎ許されよ。友の形見の 木目込み人形  
節分の豆まきをせし父の声 くぐもる声ぞ 遠世の顎ち来

## 中島央子

おもかげ

・森

## 白子れい

ふる里

・洛

おもかげを重ねて尽きぬ窓の辺に花に埋まるハクはかへらず  
 これの世の別れに老犬ハクの鼻 水のごときに頬を寄せたり  
 冷たさは頬につたはりゆつくりと浸しはじめる身の芯までを  
 人はひと犬はいぬの形して真白き小さき壺に納まる  
 信号が赤に変はればオスワリをしてるしハクの逝きて一月  
 戻年にハク亡きわが家の正月を娘と黙じ煮染をつまむ  
 〈ツキミ〉〈トックリ〉の名の小型犬角曲りゆくを目に打ちまもる

## 中島義雄

追儺の豆

・岡

慎ましき祖を繼ぎしも遙かにて七草粥の淡きを啜る  
 左義長の巨火夕風を押し分けてわが残り生の天まで騰れ  
 雪の降る間しんしんといづくにか追儺の豆撒くふるへ声する  
 齡の数の一割の豆噛みをれば追儺の夜の間がひびきぬ  
 ひとつ炎目守るとごとく生きしへし妻へ施すは香のひとすぢ  
 立春は結婚記念日常よりは明るき燭をかけやるべし  
 ためらはずありのままなる歌為さむ妻よ挽歌の間に誇ふな

## 萩葉子

雪

・銀

七草がゆ鏡開きが誕生日ふたりの兄に「おめでとう」の電話  
 新しい年がはじまり一ヶ月堂めぐりの歌を詠みいる

小型版の辞典を買ひぬ何処へでも持って出られそう 寒椿咲く

ふるさとに帰りし心素足にてそとおりたつ雪ふる庭に  
 セーターの袖にふる雪やすませてちかぢかに見る結晶美しい  
 節分の豆をもとめてバス電車乗りつき遠くへ行きたい私  
 家にくると息子は必ず鞄からお茶をとり出し置いて帰りぬ

## 浜谷久子

新春

・地

素通りの見知らぬ並木去年よりは子の住む町の温もりの中  
 子の家族五人が走るこの町のその日暮らしが迎える新春  
 一年の節目も垣根も蹴散らして新年乱入三人兄弟  
 糸のように続く賀状の真ん中に会いにいっても?と短い言葉  
 会うことのない十余年それぞの子は親となり我らを老いさす  
 暖かくなるころどうぞと出す返事エンドウ豆のエメラルド色  
 年來の友との再会約束の増える今年の春の行方は

ふる里は近くなりたり山の屋根ひらき新道 蝶の運転  
 ひさびさに父母の墓前に佇ち得たりこころ鬱きいしものの溶けゆく  
 父よ母よお久しうぶりとあわす手にボロリと涙うれし涙の  
 ちち母の墓前に佇ちてあわす掌にふくふくぬくき親のぬくもり  
 今さらに気付くも詮なし離れ住み親に孝養なし得ざりしを  
 線香のけむりの搖らぎに父ははの声をきくなり励ましの声  
 ふる里のみ墓にこころ満たされぬこのひと年をかがやき生きん  
 ぱぱりょうこ 野太きお声

師の歌碑に初春の御挨拶ふかぶかと礼なしたれば「おうおう来たか」  
 師のきみの野太きお声とよもせる睦月十四回めも「おうおう来たか」と  
 白鳥の二羽よりそいてただよう御夫婦なるらんと碑の辺に  
 月満ちて湖のおもてに山影を写すべりと道さに映ゆる  
 鳥からの「おとしだま」とし愛でいたる千両づぶらに新年を彩う  
 名前なき賀状いただきうらおもてしげしげと見てなぞなぞ遊び  
 一枚の賀状ひらりと舞いきたり「十円不足」と松の内超えて

## 浜本 芙美

網

・夢

## 藤川 和子

丑三ツ刻

・眉

寛と街路を歩むわが胸を選びて飛びくる木の葉一枚  
 すぎし日の思い出さる身の心より明日を思えという声のする  
 いっぱいの網を握りてゆく列の園児が手を振るわが家の前  
 世界中不穏の空氣ながれいて園児この子らのゆくすえ思ふ  
 もみじの手ぶりで笑顔の幼らに個性の芽ばえはじまりていん  
 黄の帽をかぶりて園の遊び場を走る園児らひまわりの花  
 パンジーの黄の色選び鉢に植え春へとむかう門の辺に置く

## 檜垣 美保子

雪

・昴

たちまちに紺のコートがぬれてゆくぼっぽと降るばたん雪降る  
 新の束雪にぬれいて火を焚けば煙目に沁むこのなつかしさ  
 ははとわれ六日ちがいの誕生日ふたりにとどくカップとプローチ  
 一階のははの足音ひとりごとくしゃみのふたつ立春の朝  
 たよりなくうす雲ながれその空のひかりのなかを雪の降りくる  
 ひよどりのしきり鳴く声呼ばれたるものとし聞けり空ひらくとき  
 こきざみに椿の枝のゆれており鶴の去り目白きており

## 福田庸子

眠りのままに

・今

例幣使街道音の絶えたる三ヶ日むかしの思ひほぐしゆくなり

スコップに雪削る音坂道はやうやう届く朝の光に

ふりかへる齡となりてはろぼろと据ひく富士をひたすら追ひぬ  
 フラメンコのステップ美事に踊りしを意識なき三年横たはり生く

夫を送り医院たたみてゆるぎなく充つる暮らしの突然に消ゆ  
 スペインを旅せし日々にひたりゆく夢続けてよ眠りのままに

八つ頭煮ふくむ味は若き日の我が問ひしをいま母が問ふ

## 藤田美智子

こばれ繭

・新

雪降れば思ひ出すもこばれ繭を集めて糸を紡ぐ指を  
 雪積める沼の重さよわが歌を寂しと言はれしことを思へり  
 雪の野に小さき風を起こしたり今し飛び立てる鷲の翼は  
 太き枝と幹に電飾は巻かれたり夜の樹は細やかな枝を失ふ  
 引るほかないのだとでも言ひたげに輪郭のなき月が昇れり  
 わが心にもひよいと入りきてはくれまいか小さき水たまりに映る青空  
 おたがひさまと言ひ合ふ暮らしをわれら持つ（絆）の流行るすつと前から

## 船田清子

汝が歌が呼ぶ

・天

歳末を剪定されたる家々の庭木すつきり新年の顔

指先の冷えにたしかなる寒の来てむつき凍てにし悠<sup>ゆき</sup>日々たつ

道の辺に滲める水のシャリだつは氷の花か 寒さを見する  
 遣歌集の選歌なしつつ思ひ出を連れ立ちたどるふたたびの旅

砂漠の砂に細葉のみどり花穂のピンク懸命の草の名 ああ出て来ない！

先導者なきまま歩むラクダの列につれて聞より「タ・マ・リ・ス・ク」の花  
 駒ヶ岳 汝が歌が呼ぶかの抱擁大沼公園もみぢも燃えて

牧 雄彦

メタセコイア

・大

三浦好博

頑なに

・銚

もみづるは老化現象といふなれど葉の散る前のこのはなやかさ  
人気なく灯もともさざる角家のあるじ逝きしとけふ聞きにけり  
人を恋ふこころきさせり高だかとメタセコイアの枯枝天を突く  
きりん草いちめん繁る野をわたる風には冬のこゑ混じりる  
何もかも中途半端に過ぐしたる思ひのままに除夜の鐘きく  
締切の迫る原稿投函し午後三時ひとりコーヒーを飲む  
この日ごろ思ひ違ひの多きことナンキンハゼを見上げておもふ

松浦禎子

外人墓地

・羊

「光榮の路 向かふ所は墳墓のみ」トマス・グレーの詩句門柱に  
大楠の木陰にひそと横たわる石碑に刻めり Meet Again  
快樂亭ブラック名の十字架より落語家なりというそのわらいはや  
フランスの菓子職人の妻なるかヤスコルコントの碑に百合の花  
外人墓地旧盆間近の草いきれつく法師つくつくと  
はし太鶴わがもの顔に目の前を横切りゆけり蔑視のさまに  
外人墓地を遠くながむるアパートの窓辺あたりに北村太郎

松永智子

地軸

・嵐

茫漠とすきける曉月かたちにはなり得ぬものあり雪すこしる  
さんさんとふりくる光しらしらと降りきて消ゆるこの朝の雪  
こゑにするいとまのあらず雪のやみきさらぎの空音のなく冷ゆ  
雪ふかき野をかなします言ひしこゑことばそのままかなしみ聞けり  
降る雪の地にはとどかず消ゆる朝とほく人呼ぶにんげんのこゑ  
ことばにはなり得ぬことば追ふもよし朝焼けの道人の影なく  
かたぶける地軸をおもふ日のあした空仰ぎたり雪の降り降る

エンディングノートに加へる書き置きの一つまた増ゆなかなか死ねぬ  
清掃の奉仕の公園トイレには北風映す鏡のありぬ  
新年の丘に来たれば貧者にも青空開け水仙匂ふ  
世に甘え妻に甘えてなるものか背筋ピンとす後期高齢  
ボールペン元に戻せとまた言ひぬもう諍へる歳ではなきに  
雪かづく椿の花の凜としてひたむきにとも頑なにとも  
水雨降り続く街裏おと高く竿だけ売りの行きては戻る

宮本靖彦

テレビの予報

・凌

東空に満月のぼる満ち欠けの様は予報に皆知つてゐる  
身を削り消えうせ暫し甦るテレビの予報に月をいとしむ  
雪かづく白山を右手に日本海暮れゆくを愛づ出で湯の先に  
加賀街道墨絵の世界に雪しまき前面ガラスに雪へばり付く  
立杭の登り窯花瓶五百円名と美を惜しめ博愛の人  
寒朝に植ゑたり貰ひしみかん苗鳴門の風味持ち育たむや  
忘れるし空襲地獄絵戻りくる桃原昌子の『沖縄』読めば

三好聖三

緑陰

・伊

自立へと促す仕草さてもさて母は子猫へ牙を剥き出す  
満ち足りる寸暇もなくて欠けてゆく月あり歌の道行きもまた  
今朝もまた野菜を摘みにゆくのだと人間嫌いの老爺が笑う  
牛糞の匂いかすかに漂える地面に青きアスパラの首  
柏原宗一と薬師丸ひろ子がすれ違う玉川学園緑陰の道  
いまもなお〈セーラー服と機関銃〉黄色いリュックの傍らに聞く  
陸軍の謀略を読む朝あけのひかりかすかにカーテンを透く

御代田澄江

ふるさと

・茨

山下雅子

向き向きに

・習

夫逝きて結婚記念日祝へすなり淋しみて妹を喜劇に誘ふ  
子を亡くし悲しむ妹と観るコメディー場内沸けば貲ひて笑ふ

劇場ゆ新橋まで乗るタクシー内姉妹は語るふるさと言葉

国訛りかまはず語るに運転士話に入り来僕のふるさと茨城ですと  
タクシーの領収証コードのポケットゆ出で彼の日の会話光景甦る  
予約の広辞苑入荷に買ひぬ持ち重り<sup>2 kg</sup>に帰路は腕脚リハビリ  
広辞苑買ひてすつしり重たきを頼り生き抜くアラハン時代

もとむらしげと

西郷どん

・そ

西郷も大久保も見し桜島左の裾より初日のぼれり  
方言の違和覚えつつ見るドラマ紛れもなき薩摩弁も混じる  
西郷と大久保の家が隣り合ふ不思議と思はぬ加治屋町の奇跡  
どつしりと動かぬはずの西郷が毎週わめき地団駄を踏む  
西郷を鼓の音に喩へたる比喩の巧みさ龍馬は凄し  
西郷の遺訓残れるは庄内藩武士の心の篤かりしゆゑ  
英國へ渡る若きもののふを乗せて羽島の夜へ漕ぎだす

八乙女由朗

家紋

・柴

一月は小寒、大寒冬最中部屋の日差しがどんどん逃げる  
正月の残りの餅をお汁粉に今朝は二度目の正月氣分  
くるくると剥きゆく林檎透きとおり蜜がほのかに匂い立ちくる  
来し方の滲む両手を合わせつ今朝も唱うる般若心経  
若き日の日記一冊また一冊胸処に秘めてゴミに出しゆく  
『九十歳。何がめでたい』と愛子さんページ繰るたび同感、同感  
バレンタインシーズン到来職退けば葵理チョコ本名チョコも過去形

横田敏子 一月

・福

風吹かばあえなく散らんくれないのばら寒空に残る一りん  
推敲に耽りて見やる庭の木々剪り込まれたる簡潔の妙  
曲がるたび赤々もゆる山茶花をバスより見ゆくりハビリせんと  
かろやかなる身体の動きの戻りこよ折鶴蘭は向き向きに搖る  
生卵に黄味二つありはしゃぐ児は「コケコッコー」の鳴き声知らぬ  
新年の冷気を縋いて香煙る墓前にしのぶ二十三年  
静かなる朝の道のしらじらと降りみ降らずみふたたびの雪

吉内尚彦

蓮根の穴

・浜

わが家系僧にありせば衣着るを常とし家紋のあるを氣付かず  
ある日ふと伯父の羽織の紋に見し左三ツ巴亀甲の縁  
僧にあれどわが憧れのつづまりは家紋着けたる勇姿もくろむ  
祖たちは仙台藩の士族にて明治に活躍したるもありき  
晴れの日は紋付袴の婿となり妻の生家の上座に穩せり  
午後の部の我が家の挙式はいかばかり仏前結婚式にて候  
着古して伯父が残ししインバネス演芸会のほかに用無し

病気にはかかれど病人にはならず歌会に出席頑張る彼は  
丁寧なる一首一首の感想を残して病に中退される  
高齢者の多き歌会に何時誰が体の不調を起こすや知れず  
同世代に生き居るわれは公務に多忙をきわめる陛下を思う  
老・病と向き合いながら公務に無理を重ねる両陛下なり  
老・病は避け得ぬさだめ明日には今日は見えない坂現れるやも  
時雨雲の覆う野や山蓮根の穴を覗けど先見通せず

吉永惟昭

シャンソン

・熊

磯田ひさ子

沖の小島

・森

吟詠の道一筋の友なりき名付けし流儀和風シャンソン  
シャンソンは何かと問えばフランスの軽妙歌謡と照れて答えさ  
軽く入るシャンソン吟は縦横の喜怒哀楽を込めて響かう  
友逝きぬ縊ぐに人なきシャンソンの声調恋し開炉裏懷かし  
春節は「國敗れて山河あり」酔い惚れさせし友のシャンソン  
恵方巻南々東に向いて噛りつくとき「春望」の韻  
「鬼は外」撒きいる豆を啄める鳩は一羽かシャンソンの友

朝井恭子

祈る

・森

真白なる四手のさやさや揺るる下くぐりて祈る歌を給えと  
常磐木の杜の中なる手子神社心つつしみ元朝参りす  
北斎も描きしといふ社に平成の我ら列なし構る  
群れをなし川上りゆく鰐の稚魚即かず離れずの距離保ちつつ  
梅櫻と咲く如月の寺庭に亡き師の声す「背筋のばして」  
渋谷なるハチ公前の人を待つ景の変らず昭和も今も  
ハチ公を囲む人待ち顔のなか彼の日の我もいるにあらずや

飯田勤

雪降り

・む

雪降りの予報を聞きて門前の樹を守らむと支柱立てたり  
しんしんと降りくる雪はつけの木の枝々覆ひてなほ降りつもる  
降る雪は数十年ぶりの大雪と声彈ませてテレビ告げをり  
青々と晴れわたる空目に眩し庭に積りし雪の輝く  
庭隅に積み上げ置きし雪の山日毎溶けつつ小道流れ  
藁草履はきて雪道通ひたる辛き想ひ出いまだ忘れず  
校庭に雪のつぶてを投げ合ひし親しき友等ふと浮かびくる

一月の糸川沿ひのほの明かり梅に先がけ熱海のさくら  
波広く疊みては消ゆ実朝の詠みたる冲の小島に来たり  
文学に興味示さぬ乙女らを宥めて『うず潮』の碑の前に立つ  
幾曲りしたる丘の上あかあかと群らがり咲けるアロエ尖りぬ  
リユックサックショルダーバッグまたリユック七福神を巡る一行  
老い人の祈り短し手を合はすそれさへ難儀どうなだれて笑む  
めぐすりの木の紅葉の添へられて九十歳の寒のたよりに

市原志郎

雪降り積む

・萬

目覚めし時かすかな音して降る雪の形を見たり庭の葉先に  
リハビリを終えたる時に音もなく降り積む雪のありたるを知る  
雪積もる表の道をゆらゆらと歩き始めてリハビリ楽し  
またひとひら雪舞い落ちる庭先の赤きぼおずき重く揺れる  
昼のもの買わんと出で行く妻の姿雪降る中に襟立てている  
いくひらか舞い落ちて来る夜の雪どこかで「鬼は外」の声はしないか  
ほくほくともを食べおりかさかさと手を揉みており一月末日

市原やよひ

雪

・萬

雪予報びたりと当たるしかれども交通混亂既定の如し  
大雪のニュース一日駆けめぐり駅に溢るる人も活写す  
雪道に転び電車に一時間閉じ込めらるると息子のメール  
降り積もる程に雪が消して行く音なき夜を楽しみてゐる  
月食の赤銅色の月を見る一月尽の凍てつく夜に  
雪深く積もれる夜の月蝕を一人見てゐる一人しあらねど  
朝顔の枯れたる蔓を巻きつけて粟粒程の雪柳の芽

奥田清和 冬されの庭

・大

柏原宗一 恍惚と雪ふり

・羊

六十路あまりいく年を経し教へ子ぞ校門の補いよよ繁りて  
保存せしわれの手紙をさし出だし今ある基ですと礼なす教へ子  
京大の名譽教授となりたる教へ子今も十五の少年  
職退きて晴耕雨読の教へ子は蜜蜂飼育に足らへるといふ  
生物の生きのたしかさ究めきて日日是好日蜂飼ふ教へ子  
胎の児に興亞と名づけ出征し果てたる尊父を君は語るも  
父の遺志継ぎて大器となりたる教へ子訪ひ来ぬ冬されの庭

奥田陽子 雪かずく

・羊

菊岡栄子 お節料理

・漣

やみ間なく雪降れるなかたちまちに姿えゆくいびつな樹の  
もう風にさやがす重く葉を垂るる棕櫚はわざかに形をのこし  
一步一步踏みしめ階をくだりくる児らの足あと降りつもる雪  
ふうわりとまつ白な雪の待つベンチ座る人など見えぬ広場に  
時報の鐘ながく響ける夕べなり雪をかずきて人ら帰れる  
窓あかり遠く点るをみてありぬただ白く雪のかさは増しつつ  
雪やみし朝雀ら群れきたるベランダの戸はひらかず置かん

小野雅子 亜種

・羊

菊地栄子 佐原

・湾

この年に歳になつても意味を知らぬことば辞書をひくなり亜種といへるを  
キタキツネは狐の亜種と辞書にあり狐の顔を思ひ浮かぶる  
「北」の字はホッカイドウノホと読みて漢字おぼえてゆく一年生  
次の手を教へてもらひながらする孫とのオセロなかなか勝てぬ  
作中の人物の名か俳優か思ひ出だせず想ふ名作  
昨夜の雪あらかた消えて消えのこるひとむれ路と道をへだつる  
陽はビルに沈みて残る夕空のかくも冷たき紅の色

あけ放つ座敷つらなる旧居伊能忠敬慕いて行くも  
五十にて家業をゆすり築きたる測量の功如何に学ばん  
繁榮せし佐原の町の歲月をとどめて寺の墓石古ぶる  
明るきをあゆめと叱咤の声返る恐れず歩む齡となりぬ  
こんな町どこがいいのと問いくる初めてまたみゆるどこもかしこも  
真っ先に出直し行きたる古書店の土・日のみなる貼り紙みつむ  
わが声の通じざりしに示す地図身振り大きく指差したまゝ

恍惚と雪ふりてをりただなかにやがては雨になるやも知れず  
しづしづと雨がふるなり日曜日午後の寒さは窓にいてつく  
静けさをもとめ歩みを止めにけりゆるとしてゆるとして何を語らむ  
小夜ふけて三度の揺れを感じたり階下の妻に声をかくるも  
静けさをしてしばらく雪ふれりサハラ沙漠に雪景色あり  
寒き冬となりてしばらく雪ふれりサハラ沙漠に雪景色あり  
厳しい寒さのみが手足をさいなめばだいたづらにたへろと言ふか  
寒波が近づく一九五三年鹿児島に雪ふり出でて今宵もおなし

新酒をばいいただき先週晩ひたる節酒またもや破葉となるなり  
小鳥あまた来たりて杜はにぎやかな音楽室に変はりゆくなり  
ゆらゆらと吹く風に搖れもうひとつ足を欲しげに立つ案山子あり  
雲もなく風もなき朝冬めきて湯呑み両手に包みゐるなり  
株価いま高値統きて街頭の銀杏散る散る小判撒くがに  
絵心と詩心そろふ紅葉山全山落暉に燃え尽きんとす  
秋の夜に久に酌みたる孫どわれ酒量はいたく逆転すなり

## 国井節子

爺ちゃん

・春

レントゲン写真に捉へし白き影 君を襲ひし病魔はこれか  
ひたすらに帰りたがつた古家にやうやく戻れり亡骸となり  
病ひとの戦に敗れ戻りこし八十六歳愛しみてやまず  
二人して歩きし奈良の散歩路を喪服のわれに抱かれてゆく

通夜の晚 子や孫と折る千羽鶴くらい黄泉路のなぐさみとなれ  
爺ちゃんを慕ひてくるる子等がをり何より大きな力をもらふ  
山焼きの花火がそこから見えますか、遙かへだてて面影を追ふ

## 小泉泰清

「十二月八日」二

・う

トンボより小さく見ゆるB17青空高く東京写すと

東京を撮り終りしか群馬県の飛行機工場爆撃はじまる  
学徒動員始まりわかれら小五生 校庭の隅に防空壕掘る

春は花夏に緑葉秋紅葉冬の裸木戦雲覆ふ

ボ宣言受諾拒否とは國体の護持とふ言葉憲憲に潜みて

國体の護持とふ言葉いま思ふ天皇家守る呪縛であつたか

二次大戦戰勝國が核を持ちその他許さず争ひつづく

着價れぬはいやだと逃ぐ魔の二歳捕まえ着せれば 手をポケットに  
少子化の行く先知るやカレンダーの数字読みあぐ二歳のおのこ  
早や目覚め廊下をとんとん駆ける音戦はじまる大人の覚悟  
下の子は声の小さな八ヶ月めのこはやさし親を助くる  
子を持つはリッチと言えり若者の肩に重きと学資の返済  
古着させ親も質素に子供らの学資貯めると帰りてゆけり  
外交の巧きは良しとし若者の貧困ふえれば日本壊るる

## 小西美智子

メタセコイア

・大

地に還る時はいまぞと黄葉しメタセコイアの葉はふりそぞぐ  
イチヨウの黄メタセコイアの黄土色おちばのいろのハーモニーなす  
四川省生まれの種が海を越え宇部に育ちぬ時空を超えて  
宇部の地にかつての炭坑のありしことよみがえらするメタセコイアは  
松田屋の龍馬の入りし湯「維新の湯」高き天井見上げつつ入る  
旅のあさミサイル発射のニュースあり日常となるを恐れて聞きぬ  
隣りあわせに座れるわれと目のあえる抱かれし児が声立て笑う

## 小林能子

年の余り

・羊

なにげなく見てをれば雪外灯の光をめがけ降りつる雪  
手術さへ戻せぬ視力と知らされて年の余りに読み継ぐ「歌集」

通院のいつもの道の本屋にも馴染みて棚をひとわたり見る

アナウンスは遅延を告げて中央通路に昏き「ガス灯」群がれるひと  
三日住めば浜つ子といふ 江戸つ子との違ひに頷くそれも浜つ子  
いい加減にやめようかと思ふ新聞のコラムをけさも楽しみてをり  
かさね置き氣ままに選ぶ一冊は年の余りの幸せとして

近藤栄昭 南月山

・福

陽射し避け入りたる木陰は去年の松思案の松か雨の降りいし  
頭上に南月山神社あり小さなほこら額すべくわれ  
我がいて我にあらざる足の座り祈願たらざる我が足の有り  
炎天の時短下山か回り道はい松の陰逕る足を見る  
困ったな困ったと思う愈る足になかなか見えぬ次の道標  
ならかな地図の下りの急坂に選択を悔やむまたも逕りたる  
林間のあずまや見過ぐ心急く頑張れ我が足もうすぐだ沼原

近藤芳仙 歌壇

・信

会ひとつ命もつがに終りゆく地方歌壇に三十年の過ぎ

上田市と周辺の歌会盛りあげし歌壇にありき上田短歌懇話会  
手にしたる『知具麻』二冊の手応へは十年一度の合同歌集  
千曲川流域に住み詠まれたる平成の歌五十四百十  
会をつくり我らを寄する計らひのありがたきかな昭和のみやげ  
夕の陽に実をふくらます大公孫樹師のみ墓邊は静まりてをり  
会ひとつ幕引きせしを貢のごと思ふ日つづく年明くるまで

久我田鶴子 伯母逝く

・羊

我を通し百歳までを生ききりてあづばれ伯母の殻ぬき逝けり  
遺影にも棺のなかにももうゐないものぬけのからなり空は明るし  
みづからが選びたりし一葉の伯母らしからぬ力の抜けかた  
十人の親族のみのおとむらひままごとのやうに焼香をする  
我が強さ第一級を怖れられ独りを生くる手立てとせしか  
離婚して子のあるなどは言はぬまま死にたる伯母ぞ子に抱かれゆく  
いくたびも書き換へるしも消えざりてをさまるところにをさまりゆける

現代歌人協会主催 朝日新聞社後援

### 第四十七回 全国短歌大会作品募集

今回も左記の通り作品を募集いたします。奮つてご応募ください。すべての入賞作品を作品集に収録いたしまして、応募者全員にお送りいたします。

作品 新作五首以内 (何組でも可) 未発表作品に限る  
参加料 一组三千円 (学生は一千円)  
※ 学生は小学校から大学(専門学校を含む)まで。  
学校名を明記してください。

送り方 B4四百字詰め原稿用紙に作品を書き右側欄外に  
郵便番号・住所・氏名・年齢・電話番号を明記。応募料  
は現金留まつたは郵便為替を同封。または郵便振  
替。(振替口座 00190-2-1016 必ず受領証また  
は写しを同封してください。)

〒107-0033 皇居区駒込一丁目五十四-1501  
= 現代歌人協会 全国短歌大会事務局

締切 平成三十年六月三十日 当日消印有効

選考 五十嵐順子 大塚寅彦 香川ヒサ 小島ゆかり  
三枝浩樹 坂井修一 外塙 番内藤 明

賞 全国短歌大会賞 朝日新聞社賞 学生短歌賞 選考賞

開催日時 平成三十年十月二十七日(土)午後一時から五時  
会場 学士会館 東京都千代田区神田錦町三一―二十八  
行事 入選発表・入選歌批評・授賞式

特別選評 三枝浩樹 東直子

第四十七回 全国短歌大会

## 志賀の歌

(『太陽のある風景』より)

栗の實を折りとらうとさし伸べる腕のうらのあをい靜脈をみてしまつた  
おにゆりの赤い花辨が生理的なふかい怖れをきみにいだかせたらしい

それは果實の微粉ほど脆弱な理性をうばひさるほどの美しさ

髪の毛に木の葉のかげは休んでゐる、松脂のにほひが漂つてゐる

ながれに揉まれざくろの花などながれゆき、いつまでも黙つたまま

太陽はうつくしく空にあがつてゐる、植物はしづかに搖れなびき

きみの家の窓から光線がながれてくる、ひらひら蝶々がよこぎつてゆく

ぼんやりと花屋のショーウィンドーを眺めてゐた、花の吐息にグラスは曇つてゐた  
僕の胸にボールのやうにきみが飛びこんで來た日のからりと晴れたそらの青

花瓶のかげかすかに壊れ、吸取紙のやうに壁はわたしの吐息を吸ひ

セピアいろのグラスになみなみビールを充たし夜の重たさにたへてゐる

風に揉まれる楊柳のうしろにやはらかい眸のやうな空が澄みわたり

(いずれも初出は「詩歌」昭和13年1月号 作者27歳)

## D I Y

村上　旭

回想

## 今月の二人

脚立ごと倒れはじむる一瞬を危ふく堪へ鉄板押さふ

雨風にこらへ切れなきサイディング鉄板張りてひとまづ終へぬ  
張り終へて触れたる車庫の滑らかさ罪なき白は雪より白し

鉄板もいつしか鏽びるその頃はペンキの塗れる男の居らじ  
滑つてはならぬ瓦のずれを蹴飛ばして縦一列にコーリングせり  
遺憾なる瓦のずれを蹴飛ばして縦一列にコーリングせり

縛るには被覆をしたる線の良しアンテナ線も物干し竿も

後からの雨戸に押されずらさる奥戸車を低めに保て

戸車の下地は木と弛みがち三センチ長のネヂを用るむ  
玄関につまでも鳴れカラカラと指一本に雨戸は走る

初夏の来よ貧乏くさき床鳴りは下に潜りて直してやらむ

これまでの腐食よさらばアンテナを止める金具はアルミとステン

騒然と搖るる家屋に案するなもしもの家具は固定されをり

一九八九年に青柳猛先生の門下生になつた。人徳があり会員から慕われた先生は亡くなられてしまつたが、もつと長生きして欲しかったのにと今でも残念におもう。

九四年に三浦好博氏の発案で「銚子歩道」の有志と一緒に「翔の会」を立ち上げた。指導者は、新聞短歌で力を發揮していたこのある小田朝雄氏。当時選者だった山本友一先生から「新聞短歌は止めた方がよい」と忠告されたそうである。「地中海」に出す歌はこの会で整えたのが多かった。会は十八年続いたに勉強になった。「翔」というカラフルな冊子も発行して楽しめた。

私は、有能で純粹に生きた人に惹かれる。折々に、細川ガラシャ、金子みすゞ、テレサテン、李香蘭（山口淑子）、川田正子について拙いながら歌を作ってきたことは良かったと思う。しかし、早世した三人を思うと心は軽くない。

テレサテンの声はきれいで自然流、飽きることがない。以前から中國語音声による漢詩紀行に馴染んでいたのでテレサの中国語（北京語、廣東語、台灣語）の七三〇曲を聴いても抵抗感はない。そして漢歌詞はB5判の数冊に纏めたものを開いている。

## 金魚と二人

荒川 信明

短歌を楽しむ

金魚掬いのおまけの二匹をぶら下げる二人しがなく家路へ急ぐ  
金魚の名「大ちゃん」と「チビ」と呼ぶことに一人ぼっちの家族に迎え  
バスにあらず美人でもなく人並の日の丸の赤の金魚を愛でる  
話題なく語らい足らぬ一人には金魚の仕草に弾む話が  
産土を聴いても金魚は答えない今の暮らしが幸せなのかも  
水槽に泳ぐ金魚のきらびやかさ目に映りしは動く宝石か  
おはようと妻と金魚に挨拶を健やかにして一日はひらく  
待つていいのか一日一食の総合栄養食を空かした腹にパクパクと食む  
そんなにもあくせくせずとも齡としは取ると言つてはいるがに金魚の唇  
睦まじく暮らす水槽のガラス張り密かに聴きたし金魚の会話を  
二匹とも祭りの金魚になれぬ身さこの水槽を終の棲家に  
精を出し金魚の世話をする妻なるは母親がえりの顔のみえがくれ  
この年の祭の金魚に癒さるるうらさびし夫婦の救いの神か

継続は力なりと言うが、何と言つても一番大切なものは、父母から頂いた寿命を重ねる事と思う。短歌を始めて十三年余り過ぎたが、まだ入口の段階と思っている。今日まで続けてこられたことが自分なりの宝物と思う。

退職後の自由な時間をどう過ごすか悩んだ末に、万葉集にいくらか興味があり、金もからず脳トレに最適と思い、短歌を選んだ。団地内に平成十一年に発足した「長命ヶ丘短歌会」に入会し、講師の佐久間辰先生の指導を頂く事となった。その後、地中海に入会。月一回の湾の会の定例歌会でも先生の指導で短歌のイロハから、日常生活での常識や何となく見逃しがちなユニークな雑学などを勉強している。先生は常々、「美しい心で」「テーマを決めて」それに向かって作歌するよう言っている。

この十年間に詠んだ短歌を時系列的に纏め、二部構成にし、「結」として自己流で編纂。一部は、短歌六八三首。二部は、自分・家族史と写真集とした。大勢の歌人の友と親しく語らう楽しみも人生の大好きな時間と思う。日詠みした短歌を日記の余白に今後も綴り続け、楽しい余生としたい。

◆今月の二人・村上 旭作品評 ◆

瓦のずれを蹴飛ばして

◆今月の二人・荒川信明作品評 ◆

評者・久我田鶴子

タイトルの「D·I·Y」は、「Do It Yourself」、自分でやろう、ということ。近頃は、日曜大工を言うらしい。

・雨風にこらへ切れなきサイディング鉄板張りでひとまづ終へぬ

「サイディング」は、建物の外壁に張る仕上げ板材のこと。

村上さんの住む銚子は雨風の強い所だから傷みも激しい。外壁に鉄板を張って、なんとか作業終了。ほっとした感じが漂う。

・滑つてはならぬ瓦の端に乗り悠々として極のゴミ取る

極に溜まったゴミを取り除くのは、危険きわまりない。それでも、瓦の端に乗って悠々と作業しているところをみると、身軽で手慣れた人なのだろう。

・遺憾なる瓦のずれを蹴飛ばして縦一列にコーナーイングせり

これも屋根の上の仕事。瓦のずれを直しては、接ぎ目に防水性の高い材を埋めてゆく。瓦にちゃんとしろよとも言うよう

に蹴飛ばしている姿が目に浮かぶ。「遺憾に思う」「遺憾なく力

を發揮する」などとは使うが、「遺憾なる瓦」はどうか。

・これまでの腐食よさらばアンテナを止める金具はアルミとス

テン

金具の交換。アルミとステンレスに換えて、これでもう腐食の心配なし、というわけだ。アルミニウムをアルミと略すのは一般的だが、ステンレスをステンとするのはどうだろうか。

一連を読みながら、ホチキスでガチッと止められた原稿の束を解くのに、村上さんがホチキス外しをいくつも作ってきてくれたことを思い出した。それは今も現役で活躍中です。感謝!

仙台にお住まいの荒川さん。妻と金魚二匹との暮らしを、楽しんで歌の素材にしている。

・金魚掬いのおまけの二匹をぶら下げて二人しがなく家路へ急ぐ

「金魚掬いのおまけの二匹」というのが泣かせる。自力では掬えなかつたのだろう。おまけに貰つた金魚をぶら下げて一人で家路を急ぐ姿は、ちょっと情けない。でも、それを言うのに「しかなく」でいいか。「家路へ急ぐ」も助詞「へ」でいい?

・バスにあらず美人でもなく人並の日の丸の赤の金魚を愛でる「バスにあらず美人でもなく人並の」ときて、金魚のこととは。しかも「丁寧に」「日の丸の赤」と続くとは。

・おはようと妻と金魚に挨拶を健やかにして一日はひらく

三句目でちょっと切るのだろう。下の句「健やかにして一日はひらく」は、ラジオ体操の歌から来ているようだ。「健やかな胸を……開けよ♪」である。遊んでるなあ。

・そんなにもあくせくせずとも鰐は取ると言つてはいるがに金魚の唇

これ以降、金魚の唇を無視できなくなりそうだ。もの言いたげな金魚の唇、そこに「そんなにあくせくするな」という言葉を読み取つた荒川さんだが、私には余裕の荒川さんと見える。

・精を出し金魚の世話をする要なるは母親がえりの顔みえがくれせつせと金魚の世話をする妻に、子供の世話をしていた頃と同じ顔を見た作者。「母親がえりの顔」が見え隠れしていると詠む。「母親がえり」とは、よく言ったものだ。

天つ風：これやこの：ちはやぶる：この

夜も札を読みあげる母の声を皮切りに茶の間が賑わう。一家團樂、百人一首の札取りの始まりです。当時、子供ながらに五七七の抑揚ある節まわしに心地良さを覚えたものです。短歌という形式よりも百人一首の軽妙なリズムに引きずり込まれたのかもしれません。

中学の教科書で石川啄木や与謝野晶子の作品に触れ、短歌に興味を持つようになりました。

たった三十一文字のうたが一度作者の手から放れひとり歩きをすれば、一編の小説となり理解されるのです。叙事の中に叙景を、叙事の中に叙事を汲み込むことにより奥の深いものとなる。即ち短歌の力と言えるのでは。啄木の一連のふるさとの作品も、担当とした表現ながら行間には深い心の内を吐露しているのです。

多感なころに与謝野晶子を知りました。

当節の女の立場はまだ弱いものと思いつ込んでいましたが、晶子のうたは女の性を堂々と正直にさらけ出しており、愛と信念を貫く姿に強く魅きつけられました。はたちの頃です。私も人並みに恋をしました。

悲しみの涙にあらねどとめどなく  
あふる涙きみが胸に埋む

そして、失恋を

詠みくれしうた悲しければわが詠みて  
返せしうたも悲しかりける

処女作です。

後日、思ひたって新聞の日曜歌壇へ投稿したところ、思いがけなくも相次ぎ入選となりました。選者は近藤芳美氏です。以来短歌への憧れが強くなつたのは言うまでもありません。

でしょう。

昭和五十八年、山村金三郎先生のご指導を仰ぐこととなりました。入会して間もなく詠んだうたが京都新聞歌壇に特選となり、作歌の意欲が湧いてきました。

ある日の歌会で山村先生が「表現に迷つたり、言葉に詰まつたりしたとき（しろがねの）を入れてみる」と洩らされました。

その時の歌です。  
しろがねの雪化粧なす比良連峰  
なべて湖辺の裾より暮るる  
なるほどと納得した一首です。二十五年前を思い出しております。

山村先生との突然のお訣かれから十五年の月日が流れました。近江神宮境内に建つ歌玉垣、その中央には香川進先生と山村金三郎先生の歌碑があります。その歌碑に真向かうと、無意識のうちに掌を合わせております。

## 私と短歌との出会い 188

山下 和子

それも束の間、見合い結婚と共に京都へ。  
慣れない地での生活につっしか短歌から遠ざかっておりました。長女が洛東高校入学、以前からの友人より短歌教室に誘われたのです。「短歌」は鉛筆と紙さえあればいつでも、どこでも、ひとりでも楽しむことが出来るという。なんと贅沢な趣味なん

ます。  
現在は白子れい先生のご指導のもと、よ  
り一段と短歌に親しむ幸せを痛感しております。これも偏に今日までお導き下さった  
先生をはじめ、共に学んだ歌友の方々の賜物と深く感謝申し上げます。

これからも悲しみ、苦しみ、怒りなど感情の捌け口として、短歌に縋り歩んで参り

# 作品 A

(サ行)

齊 藤 順 子

明かり

・信

夕暮に草ひきをれば隣田の人は声かけ帰りゆきたり  
古き家に嫗はひとり暮らしある細ぼそ明かりが灯りてをりぬ  
晩年の母を見舞ひし妹にいつも吾の名母は言ひしと  
反抗期吾は生意氣な口ききぬ母は悲しい顔をしてゐた  
餅をつく前の蒸し米夫と孫に配りてをりぬ母のせし如  
一日のすべての事をなし終へて漸く本の続きを聞く  
懐かしき顔思ひつつ年賀状声かくること一筆添へる

齊 藤 信 子

拉致の決断

・森

出来立ての田作り先ずは供えやる猫のモモコの好物なれば  
年ごとの賀状の束の薄くなりそろそろ吾も失礼なさんか  
五年振りに友と寄りあう嬉しさにそわそわなして娘に揶揄さる  
残業の少なき会社に転職し子らと安らぐ孫のつれあい  
奔放と噂されい亡き妻を「足がきれい」と野村監督  
雨音を聞きつゝ読みぬこころして蓮池蒸の『拉致の決断』  
悲しみを秘めて見上げる蒼空に一機東へひかりつづく

坂 井 一 江 向ひ風

・眉

・萬

面輪似し二歳の男の子携帯の向かうでしきりお喋りくる  
藻のかげに目高の群は一冬を尾びれふるはせ春待つあした  
冬の雨晴れて日白の飛び来たり椿の花に蜜吸ふ日と合ふ  
雨上がり軒端に立てば窓一羽右に左に旋回して行く  
冬枯れの庭に一群黄水仙主張するがにみぞれ降るなか  
冬天の皆既月蝕欠け始む己が心も吸ひ込まれゆく  
向ひ風に飛ばされ行ける吾が帽子自転車止めしよ高校生の

酒 井 牧

野辺送り

・萬

老い父の自分が母を恋うしばしばの語り淋しき暮秋でありき  
天蓋をさしかけられて担がれて睦月の門ゆ父は旅立ちぬ  
小止みなく降る雪払い進みゆく葬列しずしずわらじを履きて  
遠ざかる柩を直に見つめいる母の脳を占めいるは何  
村民に掘られし穴は身の丈を優に越えおり黄泉への門か  
深き深き穴に降りゆく父を待つ祖にゆだねるその先の旅  
天蓋をさしかけし兄も今は亡く草生う墓路も舗装されたり  
母逝きていかほどの時流れしや折折りみれば七十余年  
組みし掌はそのままにして密やかに母逝きませり一月十三日  
凍み強き明け方母は旅立ちぬ両手を合はせ祈ることに  
両の手は出して歩めと母の言耳に残りて雪道歩む  
長病みの母に食べよと秋ぐれば川に向かひし亡き父恋ひし  
大漁のかじかは冬の保存食焼きて吊して風にあてたり  
貧しくも戦後に食べし川魚冬の神川人影もなし

坂 口 正 子

母の忌

・信